

アブラハムは、「(罪深い) ソドムの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼしますか」と神に迫っています。そして、その正しい者の人数を徐々に減らしながら、最後には「もしかすると、(正しい者が) 十人しかいないかもしれません」(32 節) と詰め寄っていきました。これに対して神は、「その十人のためにわたしは滅ぼさない」(32 節) と約束します。では、この甲斐あって、ソドムの町は滅亡を免れたのでしょうか。残念ながら、滅ぼされてしまいます (19 章)。つまり、正しい者は十人どころか、一人もいなかったということになります。しかしだとすると、願いの実らないアブラハムの執り成しの物語には、何の意味があるのでしょうか。

アブラハムは交渉を始める前に、意気揚々と「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」(23 節) と神に物申しています。まるで、「正しい者」と「悪い者」を自分が区別できているかのような物言いです。しかし、アブラハムは神と交渉するなかで、正しい者が「十人しかいないかもしれない」と徐々に弱腰になっていくのが分かります。「十人」には、ソドムに住むアブラハムの甥ロトの家族が想定されていると言われてはいますが、だとすれば、かつて家族の間で争いごとを起こしていますから (13 章)、本当に救い出したい親族でさえ、いや自分自身でさえ「正しい者」であるとの確信は持てなかったことでしょう。つまり、アブラハムは、神を問い詰めているようでいて、かえって神の前に「正しい者はいない。一人もいない」(ローマ 3:10) という現実を問い返されていくことになったのです。

渡辺和子さん (ノートルダム清心学園) は、「あの子はろくなことをしない」と頭で決めてかかっていた子が、ふとした時に誰かの傷の手当をしていたことに気づき、本当に恥ずかしい思いをしたことがあるというご自身の体験を振り返りながら、次のように話されています。「どちらかというの良いことをわりにいつもしている人を良い人だとみんなが言い、悪いことばかりしている人を悪い人だと言うけれども、世の中には悪い人はいない。良い人もいないかも知れない。いるのは人間だけ」。

もし、正しい者が一人いるのだとすれば、それはイエス・キリストだと聖書は答えるでしょう。このお方を前にして、私たちは化けの皮が剥がされ、一人の人間であることに立ち帰らされていきます。それで良いのです。それが良いのです。そこから始めることによって、本当に大切なことが見えてきます。それによって、神は私たちを、もう一度豊かにつながわせてくださるのです。

(文責：望月達朗牧師)

